

支える

菅田 忠志

著名なヒマラヤ探検家ティルマンが、「世界で最も美しい谷のひとつ」と絶賛したネパールのランタン谷。6000^{メートル}から7000^{メートル}級の山々がまじかに見渡せるこの地を我々が訪れたのは2002年の春、石楠花^{シキナヅク}の花が満開だった頃だった。

登山活動を開始した山村では、シェルパやコック、ポーターたち現地スタッフが迎えてくれ、強力なサポートに支えられて、素晴らしい山登りを体験することが出来たことに感謝したい。

ネパールでの登山活動はヨーロッパの登山隊によってはじめられ、ベースキャンプまでの膨大な荷物には、ポーターたちによって運ばれ、高度な登山活動はガイドを兼ねたシェルパたちの支えを得ながら進められていった。こういった登山スタイルがその後の遠征登山で定着し、ヒマラヤのふもとで暮らすシ

エルパ族の人々の誇り高き職業として育っていった。このスタイルは大規模な登山隊のみならず、このたびの30名ほどの我々の登山にも同じスタイルで支えてくれ、テントの運搬や設営、食事の準備、登山コースのガイドなど、それぞれ

分担された役務を職業意識をもってテキパキとこなしてゆく。

欧米人のように、人を雇って家事をやらせる習慣のない我々には、職業とは言え、彼等の献身的とも言えるサポートに戸惑いすら感じることもあった。

「ありがとう」がなんども口に出るが、その都度「ナマステ」とにっこり笑った顔が返ってくる。自分たちと同じアジアの顔つきに、一層の親しみをもって接してくれているようだ。

ネパールは世界で最も貧しい国のひとつといわれる。下山コースで立ち寄ったいくつかの街では、子供達が通う学校も、満足な設備が整っているわけ

もなく、うすぐらい教室で上級生から順次まわし読みしていると思われるくたびれた教科書を、大切にうに大きな声で読んでいた。

しかし、学校に行ける子供達は幸せな方で、山村の子供達にはその機会すらない。

庭先に座り、くつたくなかない笑顔で黙々と糸を紡ぐ作業をしている少女。着ているものはあちこちつぎあてされたものだったが決して汚れてはいない。大事に大事に着ているのだろう。

首都カトマンズでさえ、制服を着て通学する子供達をよそ目に、学校にも行けずに街角のゴミ捨て場で収穫物を探している少年たち。どうみても使い物になるようなものは何一つなさそうなので、「それでも何か」を探している姿をみつめながらあの清らかなネパールの山々が人類の宝のように見えたが、彼等の目には日本の「荒ゴミステーション」などは「宝の山」に見えるかもしれない、などと思つとなんと物悲しい気持ちが入みあげてきた。

- 3 -

自分が子供だった戦後の混乱期に、ユニセフからの救援物資に支えられた思いから、毎年ユニセフ基金へささやかな支援を続けてきたが、今は「ネパールの子供達に学校を建てる会」の支援にきりかえた。今、世界各国からネパールへの支援活動が盛んだと聞く。現地の実情からはまだまだ焼け石に水のようにだが、自然や心の豊かさや引き換えにするような発展だけは真似ないで欲しいと思う。がんばれネパールのごどもたち。

テントを張るとすぐにやってきた村の子供達（この村の標高は3010m）

- 4 -